

- ◆日程 2017年10月1日(日)
- ◆メンバー 須田k、日比野、田村、岡村
- ◆場所 大倉、神奈川県山岳スポーツセンター

## 〔岡村〕

ザイル祭で試しに登ったあの壁。高くて登れなかった。「他の参加者はボードとか得意な人ばかりだろうな」と思うと、当日の朝、出かけるにも気が重かった。日比野さんから「目標はあそこらへん」とボードの低めのところを指し示していただき（こういうところ、さすがです）「あそこまでならなんとかしよう！」と奮ってボードに取り組んだ。結局、他の参加者とは実力に差があったけど、団体戦で3位入賞！数の論理（参加者18名中4名がうちの会）も実力のうち（?）。「全然、実力がなくても参加してもいいんだ」という具合にハードルを下げ、間口を広げておきましたので、来年はさらに多数参戦し、数字のマジックで優勝を目指しましょう。他の参加者の登りっぷりを見ると何か伝わってくるものがあります。エントリーしてみると、「少し練習してみよう」という気にもなるというものです。それで実力が付いたらしめたものです。



## 〔日比野〕

2年前にこのコンペに参加した時に、昔と比べて参加者が少なくなったなあと思った。この状況なら、参加メンバーが4名揃えば、団体戦3位入賞を狙えるんじゃないかと思った。そして、今年ようやく4名揃った。参加人数は18名と多くない。これなら我々のレベルでも、今の実力を出せば入賞を狙えそうだ。他の参加者はみんなうちの会よりもレベルが高いが、参加人数の多さで3位入賞をすることが出来た。内容はどうであれ入賞したのはとても嬉しい。今後はレベルアップをして少しずつ上位を狙っていきたい。練習よりもこういう大会で登るのは楽しい。参加者ももっと増えるといいな。

## 〔須田〕

初めてクライミングコンペに参加した。ほとんどボードトレーニングをしていない自分がコンペなどに参加するなどおこがましいと思っていたが、最近会も盛り上がっているし、団体戦なら楽しめるかなあと思い参加してみた。予選は15mの高さのABルートを持ち時間5分で1回ずつ登るのだが、最初から垂直以上で100度位の斜度がある。10mからは更に斜度がきつくなり、完登できる自信は全くない。

くじ運悪く1番スタートは田村さんとなり、ピレイヤーは私が務める。少し緊張ぎみにスタートしたが難なく完登し、流石の実力を見せた。自分は12番目だったが、11人全員完登していたのでここで失敗するとカッコ付かないなあーとプレッシャーが掛かった。いざ登ってみる

とほとんどガバで傾斜もさほど気にならない。ただ、ロープをクリップするのに手間取り、残り5mくらいのところで、あと1分！のアナウンスがきた。ヤバい！！急げとバタバタと登って何とか完登した。

1本目を完登できたので最低限の仕事はできたと安心したのか、リラックスして臨んだ2本目は開始30秒、足を滑らしてまさかの落下。総合順位で断トツの最下位であった。不甲斐ないCLに奮起したか他のメンバーの活躍により団体3位となることができた。応援に来てくれた零さん、河野さん、山野井さん、ありがとうございました。来年もっと頑張ります。

〔田村〕

自身3回目の出場となるクライミングコンペは、秋晴れのすがすがしい空気の中の開催となった。年々自分の実力が少しずつでもいいから上がっていくのを感じられるといいのだが、なかなかそうもいかない。予選の2本目のルートの中～終盤、傾斜が一番強い部分からの抜け口で、持ち味の甘いホールドが続き、上腕に疲れを感じ始めたところで、ヌンチャクにクリップをしようとするが、なかなか片手で保持ができず、クリップができない。そうしているうちに、体を引き付けることができず、次のホールドを取りに行く力がなくなってしまった。ダメだ。そこで「テンション」の声をあげてしまった。ロープに吊られてするすると下降していくと同時に、情けない気持ちがじわじわと沸き起こった。

予選で思うような結果が出ず「これはもう決勝進出はないな」と諦めていたら、なんと女性おまけ枠で決勝進出できることとなった。決勝ルート設営中のアイソレーションエリアで話をした。(私の予選の登りを見ていた)他の山岳会の出場者から、「ホールドにタッチ出来たか、出来なかったかの差が結果に影響することがよくあるので、コンペでは少しでも上のホールドを取りに行く姿勢を見せないといけない。」とアドバイスをもらい、次の決勝では後悔しないように力を出し切ろうと決心した。そうだ、コンペで「テンション」なんてありえないのだ。決勝ルートのオブザベーションでは、全体的にホールドが小さめで、足は自由とはいえ手の動きをよくよく考えて登らないと余計な体力を消耗してしまうようなルートに見えたため、念入りに手の動きを何度もシミュレーションした。

決勝が始まり、一番に登攀を開始する。ルート下部は、ホールドがやや甘いながらも、なんとかオブザベーション通りの登りで突破する。中盤を過ぎたところらへんで傾斜がきつくなってくると同時に、ホールドもガバばかりではなくなってきて、疲労を感じる。一手一手必死の思いで、体に弾みをつけながら取りに行く。「落ちるかも」「あ、取れた」「次は落ちるかも」「あ、また取れた」といった感じだ。自分が落ちた瞬間は、正直あまり覚えていない。



それほど登りに集中できたということだろう。ゴールまで登り切れなかったことは残念だったが、出来る限りのことはやったので悔いは残らなかった。ふたを開けてみれば個人8位(女性2位)、団体3位入賞の成績。みんなで力を合わせて取った3位はとてもうれしかった(今まで2人や1人で出場してきた立場からすると)。1年後、今回の成績よりも上を目指すべく、我が会のクライミングのすそ野を広げながら、今後もトレーニングに励んでいきたい。